

「新しい年には新しい発想で」と考え、市の境界線を越えて、隣接する市の学びに役立つ場所・スポットを巡ることにしました。府中市の南は多摩川でその向こうは稲城市、西に国立市、北は国分寺市、東には調布市など、7 つもの市に囲まれています。今回は北西のお隣・国分寺市へ。西国分寺駅から始まる散策コースを歩いてみました。



国分寺を訪ねて

西国分寺駅から都立図書館を通り過ぎると武蔵国分寺公園にたどり着きます。ここには大きな木がたくさんありヒマラヤスギ、ドイツトウヒ、センダンなど、木の実好きには嬉しい公園です。

(ヒマラヤスギの松ぼっくりは“バラの花”型)

この公園から崖線を



下ってお鷹の道沿いに歩いて行くと「国分寺」に突き当たります。府中育ちの私は、地名は知っていても国分寺というお寺があることは長い間知りませんでした。とても風情のあるお寺で、万葉植物園になっています。春の七草、秋の七草でも有名です。時間をかけじっくり回りたと思いました。(井口文江)

都立多摩図書館

今回一番印象に残ったのは「都立多摩図書館」でした。JR 中央線 西国分寺からほど近くにあり、2017 年に立川市から移転したようです。



立川から引き継がれた「東京マガジンバンク」(2009 年創設)があります。19,000 誌(外国雑誌含)所蔵され、最新 1 年分 6,000 誌が常時閲覧できます。なかなか圧倒される光景で、とても時間が足りません。

入口を入りすぐ目についたのは展示コーナー、壁には今回はザ・ビートルズのポスター、その時のテーマによる展示物が目を引きまします。なお奥に入ると、そのマガジンの眺めが。その内、手に取って見ることができたのは 5 誌、帰りぎわ左手を見てまたびっくり、音楽や女性誌、映画、鉄道等々、各誌の創刊号が並んでいます。創刊号コレクションだそうです。懐かしいタレントが表紙を飾っていました。バックナンバーも見なくなってきました。次回は 1 日時間を作って訪れたいと思いました。(渡邊繁雄)

秋の武蔵国分寺公園にて

11 月というのに暖かな日の午前中、武蔵国分寺公園に行った。この公園は、多喜窪通りを挟んで南北に 2 地区がある。北側は前日の催事後片付けの最中だったので、私たちは南の方へ向かったが、そこにも大きな広場があり、廻りを囲むようにベンチが点在している。広場の中ほどには大きな柿の木が驚くほど沢山の実を付けていた。この木の傍のベンチに落ち着くと早速、持ち込んだ甲州産の新酒白ワインが開けられた。平日のこんな時間に誰にも気兼ねせずホロ酔い気分で気儘に会話を楽しんだ。なるほど、外に出る元気があって、仲間がいて、美酒少々(?)があれば、人生うまくいくのでしょうか。(竹村 稔)



東山道武蔵路跡を歩く

JR 西国分寺駅南口を出て、住宅街を東に進むと、東山道武蔵路跡に出る。古代、日本に中央集権の律令制国家が誕生したとき、行政区分として五畿七道が置かれ、各国の国府へは道路網が整備された。

東山道は、奈良・京都から列島の中央部を通して奥州へ通じる官道で、武蔵国の国府が府中にあったので、東山道の支道として上野国新田(群馬県)から武蔵府中まで武蔵国を南北一直線に貫く武蔵路が作られた。近年、この路跡の発掘調査が行われ、



国分寺市は国指定史跡として整備、展示している。幅 12m、両側に側溝がある道路の一部を見ることが出来る。中央部はへこんでおり、馬が走った跡

とおぼしき窪みが見えるのは興味深い。武蔵路跡の大部分は埋め戻され、住宅と国分寺公園の間の広い遊歩道となっている(写真)。途中には解説板があり、古代の人々がどのような姿でこの道を歩いたのかがわかる。北に向かって行けば、この道がはるか奈良・京都の都に通じ、南に歩けば武蔵国分寺の脇を通過して武蔵府中に通じている。国分寺崖線の坂上に立てば、当時の旅人は、武蔵国分寺の大伽藍と府中の街を見下ろして、はるばる都から旅してきた感慨にふけっただろうと想像する。

新しい土地や新しく人々をつなぐのが道であり、この道はどこに通じているのだろうかと思いを広げるのもまた楽しい。いつの時代も道は未知への期待と希望に満ちているとつくづく思う。(奥野英城)

万葉植物園

武蔵国分寺跡の北に位置し、国分寺市が天然記念物に指定する万葉植物園は興味深い。



ここには武蔵国分寺が栄えていた奈良時代の末期に編纂された、日本に現存する最古の和歌集“万葉集”で歌人が好んで詠んだ植物が集められています。昭和に採集され現在、約 160 種に達する植物はそれぞれに和歌を添えたプレートで説明されていました。その中からキク科のうけら(和名オケラ・写真)を詠んだ一首を紹介します。

“恋しけば 袖も振らむを 武蔵野の
うけらか花の 色に出なゆめ”

意は“もし恋しくなったら袖を振って呼んでくださいれば良いのですよ。武蔵野のうけらの花のようにけって目立たないようにね”。解釈はロマンチストの読者にお任せします。(中濱敬文)